

平成 26 年度 教員免許状更新講習・シラバス

講座 番号	4	講座名	国語科教育に活かす古典文学研究の成果（２）				
担当講師	開催地	時間数	日程	主な受講対象者	受講人数	講習形式	試験方法
柳川 順子	広島キャンパス	6時間	7月27日 (日)	中学校・高等学校 国語科教諭	30人 (最少開催 人数3人)	講義	筆記
到達目標	国語科の漢文の教材にも取り上げられる中国古典文学について、日本文学との関係を含めて、その根幹を体系的に理解している。						
<p>【講座の概要】 伝統的な言語文化の理解に重点を置く新学習指導要領の特色を踏まえ、「日本における古典知の形成と展開」について考える。最新の研究成果を紹介しながら、『史記』や『白氏文集』など、日本の古典知に組み入れられたいくつかの作品を味読する。更に、その受容の外にある中国古典の全体像を概観し、それとの対比を通して、日本文学の独自性についても考察を試みる。</p>							
<p>【講座の内容】</p> <p>講義 1：日本文学と中国古典（1） 日本文学に摂取された中国古典文学の中でも、その筆頭に上げられるのは『白氏文集』であろう。この書物が渡来した平安時代、それは「もんじゅう」ではなく「ぶんしゅう」と読まれていたことが近年の研究により明らかとなった。この事例から端的に窺える、日本における大陸文化受容の歴史とその特徴をまず概観する。続いて、平安時代の貴族たちに愛された白居易詩の中から「三月三十日、慈恩寺に題す」を取り上げ、彼の文学のどのような要素が日本人の共感を呼んだのかを考える。</p> <p>講義 2：日本文学と中国古典（2） わが王朝の人々に愛された白居易文学ではあるが、一方で、必ずしも全面的に受容されているとは言えない部分もかなりある。そうした作品のひとつ「八月十五日の夜、禁中に独り直し、月に対して元九を憶ふ」詩と、これに答えた元稹の詩とを読みながら、あわせて、彼らが生きた唐代の官僚社会、及び彼らの思想や文学活動に大きな関わりを持った科举制度について概観する。この人材登用制度を視野に入れることにより、日本文学と中国古典との質感の違いは格段に理解しやすくなるだろう。</p> <p>講義 3：中国古典の全体像とその根幹にあるもの 中国の古典籍が、経（儒教の経典）・史（歴史書）・子（諸子百家などの思想書）・集（文学作品集）の四つに分類されることを概観した上で、日本の古典知として定着していった様々な文献が、そのどのあたりに位置づけられるのかを確認する。更に、この体系化された知の集積の根本にある精神を、主に儒教の経典に記された数々の言葉の中に探ってゆく。このことは、漢文の教材に取り上げられる諸作品や人物たちに奥行きを与え、それらを「古典」としてより深く学ぶための一助となるだろう。</p> <p>講義 4：語り物文芸としての『史記』 日本文学に摂取された中国古典で、漢文の教材としても必ず取り上げられる『史記』の中には、古代の語り物文芸からその源泉を引き込んだかと推測し得る要素がかなりある。この歴史書が、しばしば文学として面白いと言われる所以であろう。そうした特徴を多く含む「刺客列伝(荊軻)」を取り上げて、その語り物的要素を文体の中に確認しながら味読する。こうした視点からの読みは、教材としての『史記』に、新たな授業展開の可能性を示唆するものとなるかもしれない。</p>							
<p>【備考】 講習には、漢和辞典（角川『新字源』など）をご持参ください。 試験の際には、講義で配付した資料、及びノートの持ち込みを認めます。辞書は持ち込めません。</p>							

注) 予備日は8月3日(日)とします。